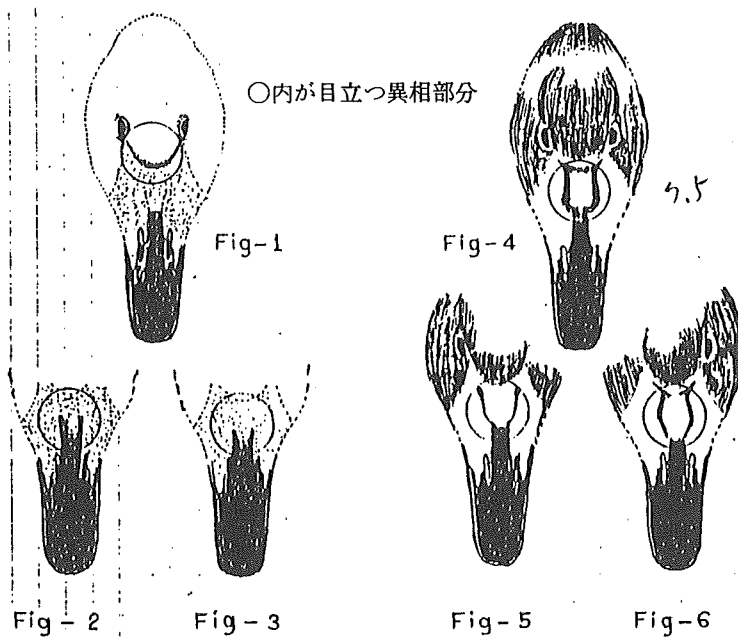


ハクチョウの嘴峰図について  
ON THE BLAKK PATTERN ON THE MANDIBLE

玉 田 誠

「白鳥の顔」「型」「鳥相」「嘴峰図」「嘴峰像」「BILL PATTERN」などと発表者によって種々な表記が為されているが、いずれもその包含する内容は嘴峰(UUPPUER MANDIBLE)および(LOWER MANDIBLE)の黒色部分の有様を指すものと理解して「嘴峰図」という統合名称を用いて記述をすすめる。先ず、日本白鳥の会の会報に発表された嘴峰図についての概要を抜粋してみる。

私がオオハクチョウ(Cygnus cygnu)の嘴峰図の様なものを発表したのは1974(S49)年6月23日に番町共済会館で開催された日本白鳥の会第2回総会の席上で、参加者に配布した北浜中学校の部報「白鳥」第3号の紙上に記載されたオオハクチョウの成長3羽と幼鳥3羽のものである。(第1図)



1図 オオハクチョウ(Cy. cy.) 6羽の嘴峰上の黒色部の違い

会報第2号(1975-S50)年に「白鳥相」と題して<5頁は白鳥の顔で、どこか何か違いがあるのではないかと思って前方斜め上から見て、黒みがかっているところがどうなっているか・・・後略>と口答で解説したものが文章化されて掲載されている。この嘴峰図は1969(S44)年春、海沸湖で得られたものである。会報「日本の白鳥」第1号(1974-S49)年および第2号(前出)はおのおの<総会の記録>

の副題が示すように設立（第1回）総会，第2回総会の会場での話し合いの様子が事細かに掲載されていて興味深いものがあるが，三上先生がコハクチョウの移動について「既成概念にとらわれてはいけない」と話されたことが強く印象に残っている。第3号からは，会員の調査や研究発表が主体となって大いに活気付いている。

会報第3号（1976-S51）年，第4号（1977-S52）年には，三上先生の「オオコハクチョウ（Cy. cy.）コハクチョウ（Cy. co.）の嘴峰正面像による識別私法」の論文があるが写真を多用しての解説で嘴峰図はない。又，会報第4号には澇沸湖で発見されたコハクチョウ5羽について私の嘴峰図が発表されているが，これは生徒が描いた嘴峰図からコハクチョウが飛来していることを確認した「曰く付き」のものであった。

会報第5号（1978-S53）年には小茂田英彦氏の別表「利根川（伊勢崎）における白鳥渡来・渡去状況」にコハクチョウ2羽の嘴峰図がある。

会報第7号（1979-S54）年には林俊夫氏の「諏訪湖のコハクチョウ」（その1）（その2）があるが，これは写真を多用しての解説で嘴峰図はない。この第7号にはまたメアリー・E・エバーンズ氏の「くちばしの型による個々のビュウイック白鳥の識別法」という論文が林俊夫氏の訳で併載されており，なかに3種の嘴峰正面図が記載されている。「ビュウイック白鳥のくちばし型の3つの主たる区分」と題して夫々Derky, Penny Face, Yellownebなる区分名称が与えられている。この嘴峰図は真正面から見たもののみで側面図はない。

会報第8号（1981-S56）年にも林俊夫氏の「諏訪湖のコハクチョウ」があるが，前号の（その1）（その2）とは打って変わり大量の嘴峰図が発表されている。氏は嘴峰図とは記載せずBILL PATTERNと称しており，その構成は「真正面図」と両側面図を併用している。その描きかたは私が1977年12月に訪れたThe Wildfowl Trustのスリムブリッジにある本部で贈り物として頂いたTHE WILD SWANS AT SLIMBRIDGEに集載されている40羽のコハクチョウの嘴峰図（P. スコット卿の筆になり真正面図と両側面図に加えて嘴峰の下面図もある）と多くの共通点を有する様に思える。

会報第9号（1982-S57）年にも林氏は「諏訪湖のコハクチョウ（その4）」として多くの嘴峰図を発表されている。

会報第10号（1983-S58）年にも私のオオコハクチョウの嘴峰図6種が掲載されているが，これはかなり大雑把なものである。しかし意識的に黒色部分の相違に留意して描いたものであった。

会報第13号（1987-S62）年にも私は「白鳥の顔」という見出しで17羽のオオコハクチョウの嘴峰図を発表したが，その殆どの側面図は省略してある。

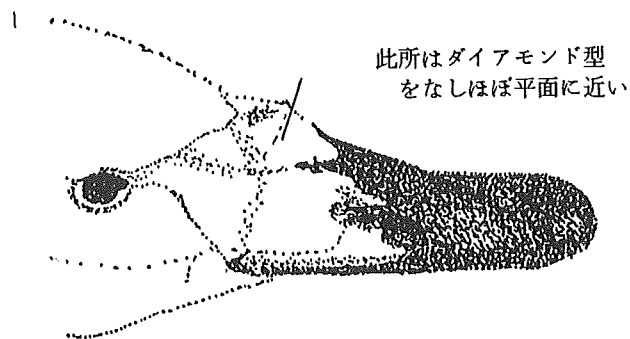
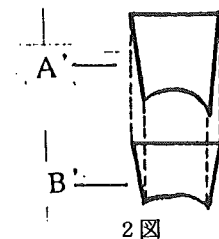
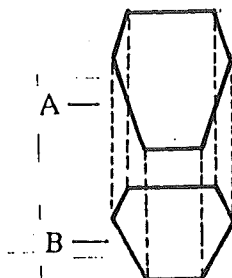
会報第14号（1988-S63）年には久し振りに三上先生が健筆を振るわれ「コハクチョウの嘴峰について」と題する論文を発表されたが，先生の手になると思われる真正面から見た嘴峰図が三葉掲載されている。その図にはMary・E・Evans, (1977) Wildfowl 28よりと明記されているが，よく見ると先に見た林俊夫氏の訳文中にある図とは僅かながら相違が見られ且つ二番目の図と三番目の図が入れ替わっている。該図の夫々に，即ちDarkyには三上Ⅰ型，Yellownebには三上Ⅱ型，Pennyfaceには三上Ⅲ型（ダイヤモンド型）として，その分類名をSiro Mikamiの名前と共に併記されている。また会報第14号には付録として三上先生の「コハクチョウ Cy. co. 嘴峰像判定私法誕生までの経過」と題する別冊が添えられているが嘴峰図はない。又同号にはアメリカコハクチョウの嘴峰側面図5

枚がある。三上先生は主としてオオハクチョウまたはコハクチョウの嘴峰上面及び下面の黒色部の違いに依って分類(三つの型)することであり、林氏は個体の識別と黒色部の経年変化に注意を向けられたものである。

私の場合は個体の識別と言う点では林氏の場合と共通点を有するがその相手はガイドナンバーが140というメタル・リング(金属環)付きのオオハクチョウであった。

右足にメタル・リングのみが残着しているオオハクチョウを発見したのは1979(S49)年11月8日、これに「1989 R-1」という仮称番号をつけた。幸いに1980(S50)年3月23日、メタルリングの固体番号を読み取ることに成功し、カラーバンドの固体番号が1C22であることが判明した。スケッチ(嘴峰図)により1985年秋迄同鳥を確認することができた。1982(S52)年12月12日、ネックバンドのみを喪失した2C53を発見、1983(S53)年1月30日嘴峰3面図を完成、同年4月12日迄距離20~30メートルでも水中にいる場合でも同鳥を確認できた。このようにしてネックバンド(首環)喪失、フットバンド(足環)喪失、メタルリングのみの、更にまた当然カラーバンドの喪失が予想されるオオハクチョウの事前スケッチ(嘴峰図)は22羽分に上り、それぞれ各鳥の発見同定に役立てることができた。

前書きが長くなったが本題に入る。結論的に述べると林氏やP・スコット卿、M・E・エバーズ氏の嘴峰図に共通するハクチョウの真正面図は「どのようにしたら描けるかということである。P・スコット卿の様に捕獲して特製のバンドで固縛出来る場合を別とすれば、私の経験ではフリーに泳ぎ回るハクチョウを真正面から見るのは困難である。当方がしゃがみこまない限りそうした機会には恵まれないが、岸边に立って見下ろすと嘴峰部上面と視線がほぼ直角になる機会が大変多い。第2図に示すように、正面斜め上から見ると、A図のように見える寸度のものを、頭の中で縦方向を圧縮して、B図の様に図化するのであろうか。あるいは、A図を描き、のちB図の様に描き改めるのであろうか。また、A'図を、B'図の様に描き改めると下部の湾曲部およびその左右の長さの差はもう虫眼鏡的になって、B'図からA'図(実像)を想像することは困難ではなからうか。実際にはこのA図やA'図に相当する部分が分類や見分け確認に必要な複雑で多様性に富んだ黒色部分に相当するのであ



此所はダイヤモンド型  
をなしほぼ平面に近い

Oct. 30, 1990. M. Tamada

3図 2C-82の立体スケッチ

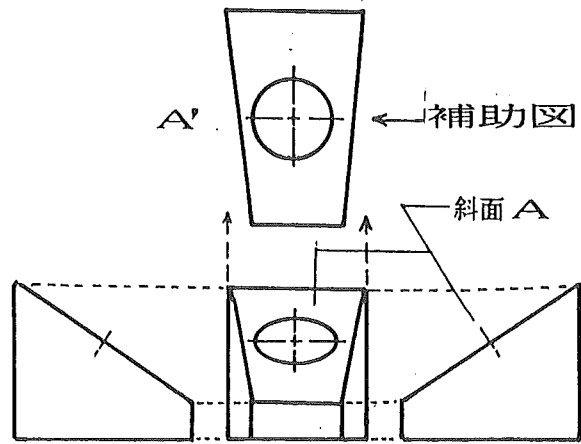
る。動物の生態を描くような人達は一瞬の間に極めて多量の情報を獲得するようであるが、私は(一寸やそっと見ただけではとても複雑な嘴峰上面の黒色部を記憶することは出来ない)私の能力の限界があつて、第3図に示したような比較的単純な嘴峰部でさえ随分苦勞して図を描いて来た。又斜正面図が先にできるとは

限らない。

動き回るハクチョウを相手に左側面や右側面のスケッチを描いたり、又斜正面図に戻ったりしながら「三面の図」が出来上がってゆくのである。また第3図において矢印の部分は平面的であって、この部分にある黒色紋様は側面図には表われない。またこの部分は真正面から見た図にするとかなり寸詰まりになって、そこにある紋様を正確に表わしえないことは既に第2図で解説したとおりである。私のハクチョウの嘴峰図にも時には多少の変則性を含むことがある。嘴峰の上面は上部から下部に掛けて一平面上にあるわけではないから場所によっては縦方向に多少の寸詰まりが生ずるが、その差異は僅少である。実際には黒色部分の一部が僅かに両側面にかかっていることもあるから、私の斜正面図には部分的に両側面の展開部分を含むこともありうる。

三上先生も林氏もその解説にはこの斜め正面方向からの写真をかなり用いておられる。P・スコット卿や林氏の嘴峰図は、それを一種の図面と考えるとその作成上の決まりからみて第三角投影法に相当する描き方である。第4図に見るように、斜面Aの詳細は「補助図」といわれる「A'図」に依らなければならない。

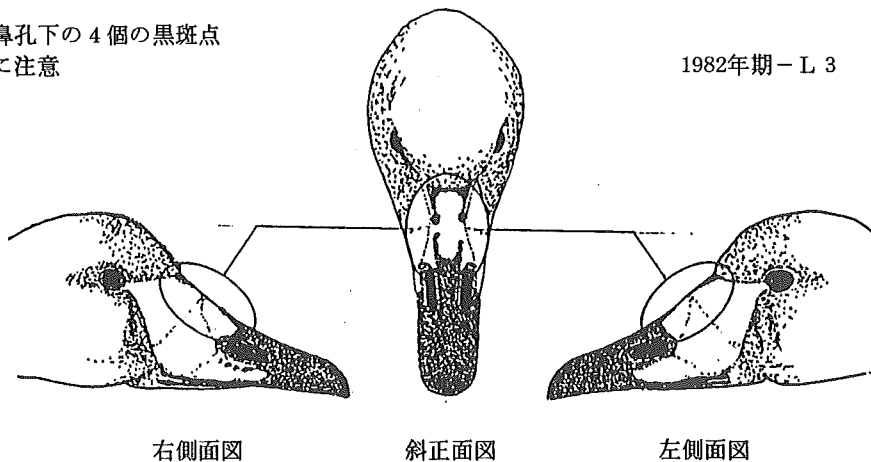
私の場合は、この補助図に相当する図を基本図（正面図）とし、上記の第三角投影法的に両側面図を配したのである。この側面図の配置には、第5図に示すような「P・スコット卿&林式」？、や「玉田式」？とも言える第6図及び第7図として示した様な幾通りかの方法がある。



4図 三面図と「補助図」

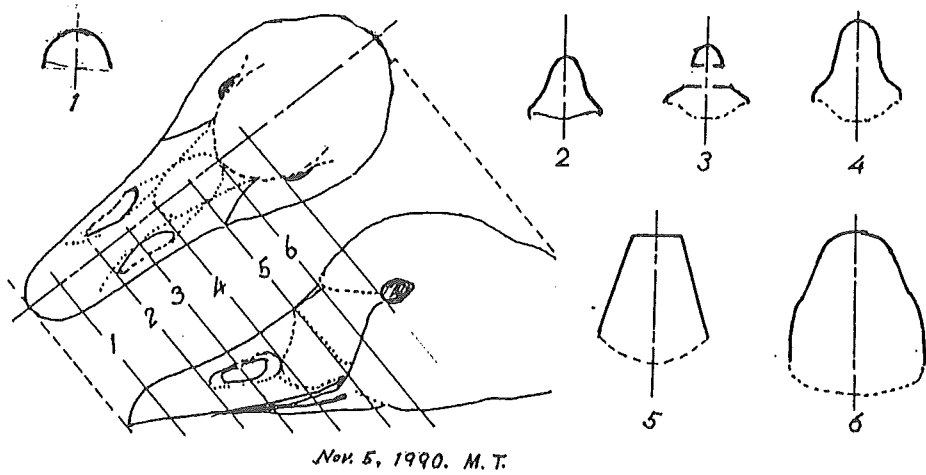
鼻孔下の4個の黒斑点  
に注意

1982年期-L 3



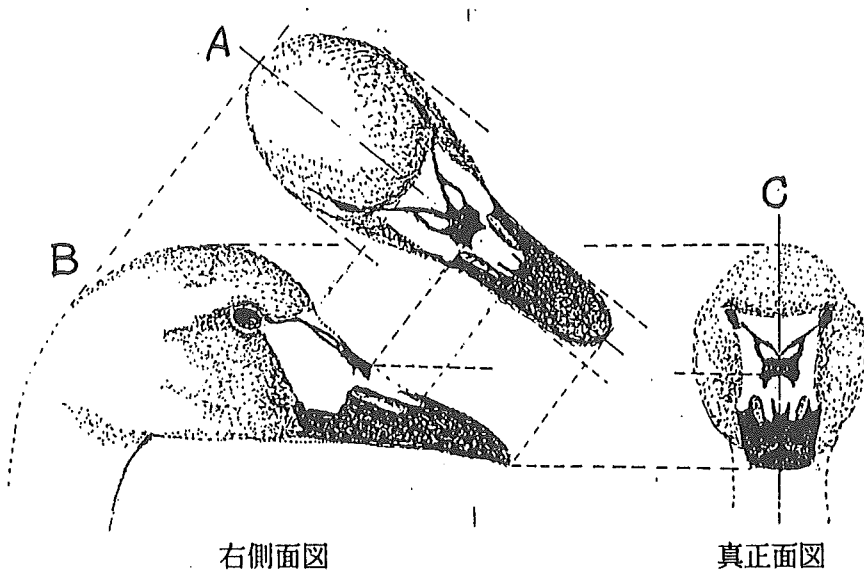
5図 オオハクチョウの嘴峰図（P・スコット&林式？配置）

又、第6図として示したのは嘴峰の断面図である。(特に下面に関して)正確は期し難いが参考に供する意味で掲載する。



6図 オオハクチョウ (Cy. cy.) の嘴峰断面図

現場で描きやすいのと、黒色部のより正確な記録には以上述べた様に斜正面からの図を正面図とした方が良い様に思える。しかし私は、真正面図が「間違いであるとか無用である」とかと言っている訳ではない。そのことの証査としてコハクチョウの嘴峰図を第7図として掲示する。真正面図の(C)は他の二つの図(AとB)から描いたもので、直接のスケッチに拠ったものではない。正面図として据えたA図には少々無理(側面の展開部分を含む=見た目にはA図の様に見える)があり、それをカバーするため



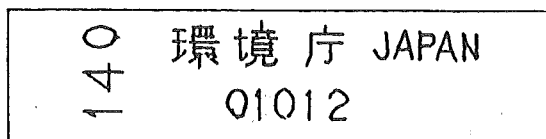
7図 コハクチョウ (Cy. co.) の嘴峰図

には真正面図が必要だったからなのである。人夫々に目的に適した図を描くのであるからトヤカク言う意志は毛頭ない。

最後に付録として、ガイドナンバー（GN）140のメタルリング付きオオハクチョウの嘴峰図を会報第13号より転載しておく。

「GN-140の固体番号は、高さが4mmで彫りも浅くて陸上においても番号を読み取ることは困難であった。新しいガイドナンバー150の固体番号は、高さが7.5mmで彫りも深いので水中でも番号を読み取れる可能性が高い。」

図中(L)(M)の記号は、メタルリングが装着されている足が左足又は右足の区別記号である。また、1982 R-5, Jan. 30, ; 83 及び頭頂部に2C-53とあるのは、1982年(1982年秋~1983年春)に発見された、右足に金属環(メタルリング)が装着された第5番目のオオハクチョウであり、首環(ネックバンド)は喪失しており、足(正しくはフショウ)環(ターサスバンド)のカラーバンドの固有番号が2C-53であることが判明していることを意味する。又、2C-46, Jan. 12, ; 83 及び頭頂部に(L)とあるのは、首環のカラーバンドが2C-46であり、メタルリングが左足(右足ならW)に装着されていることを意味する。以上の二種はカラーバンドの喪失時の対策であった。頭頂部に何も記載されていないものはメタルリングのみの鳥で、此の嘴峰図のみがその鳥の再確認の手掛かりであり足掛かりと成った。矢印が指し示すのは側面の黄色部にある黒斑点(黒色部にあるものは黄斑点)を示し、再確認に当たっては極めて有効な働きをした。



ガイド・ナンバー140のメタルリング(実物大)

Nov. 10, 1990.

